

小学校における外国人子女教育の試み

—文部省(現文部科学省)指定帰国子女教育受入推進地域センター校の取組から—

Trial of education for foreign children in elementary school:

From the efforts of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology's designated regional educational center school to promote acceptance of returnee children

古岡 俊之

FURUOKA, Toshiyuki

武庫川女子大学 学校教育センター紀要

第5号 2020年

【研究報告】

小学校における外国人子女教育の試み
—文部省(現文部科学省)指定帰国子女教育受入推進地域センター校の取組から—

Trial of education for foreign children in elementary school :
From the efforts of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology's
designated regional educational center school to promote acceptance of returnee children

古岡 俊之*

FURUOKA, Toshiyuki*

要旨

外国人子女に対する受け入れ施策は、近年の日本における著しい国際的活動の拡大に対応し、徐々に拡大されつつあると言える。これらの施策や受け入れ態勢が、外国人子女にとって多大な助けとなってきたことは言うまでもないが、必然として多くの問題が残されていることも事実である。更に年々外国人子女を取り巻く状況も複雑化し、その問題は多様化する傾向にあると言える。こうした問題の一つとして、外国人子女の異文化対処の失敗、いわゆる「不適応」が挙げられる。本稿は、外国人子女の健全な発達・自己実現の方途は何かなどの解明を目指したものである。研究方法としては、外国人子女の不適応の事例研究を中心に行った。そこで分かってきたことは、外国人児童の受け入れ、適応指導、日本語指導を上手く機能させる鍵は大きく4つあるということである。1つは個々の児童に応じたきめ細やかな指導、2つは担当者の配置と組織的対応、3つは家庭、地域の力、そして最後には地域で育ってきた子ども達である。人間尊重を基盤にした教育の推進こそが受入の要であるといつてよい、

キーワード：外国人子女 日本語指導 共生 人間尊重 地域で育ってきた子ども

1. はじめに

「外国人児童」という文言が、初めて筆者の勤務校(文部科学省指定・帰国子女教育受入推進地域センター校)研究紀要に出てきたのは、第6集(1989年度)で、そこには今後の課題として「日本語習得が不十分な外国人児童生徒や帰国児童生徒の日本語指導方法の研究」があがっている⁽¹⁾。1987年度より帰国子女教育、そして国際理解教育に取り組み初めてから3年目のことである。受け入れ態勢も軌道に乗り、適応指導や国際理解教育の進め方を追究していたA小学校に、外国人児童の編入についての問い合わせが来たのがこの頃である⁽²⁾。

それから30年。世界の情勢は地球的規模で激変し、今も変動し続けている。国際化はますます進展し、わが国において毎年多くの外国人児童生徒が増え在籍しており、30年前の状況とはさらに大きく変わってきている。とくに、ポルトガル語を母語とする児童生徒が多いのが特徴である⁽³⁾。この状況を踏まえ、文部科学省は日本語指導が必要な児童生徒を対象とした「特別の教育課程」の編成・実施について、学校教育法施行規則の一部改正(2014年)により、「特別の教育課程」での日本語指導の実施を可能とし、さらに「外国人児童生徒受入れの手引き」を改訂するなどして、受け入れ態勢の確立とその指導の一層の充実を求めているところである⁽⁴⁾。

そこで、A小学校での外国人子女教育の実践をふり返り、その成果を検証することによって、受け入れ態勢、学級指導や専任教員による取り出し指導、日本語教材作成がこれからの外国人子女教育の

* 学校教育センター非常勤講師・神戸女学院大学特任教授

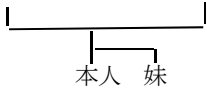
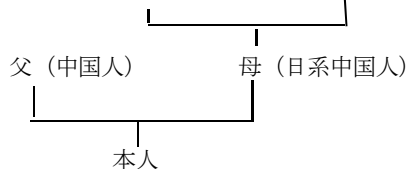
モデルになり得るかを実証的に検証していきたい。

2. 外国人子女教育の歩み

2-1 日本語の力をつける取り出し指導（1987年度実施）

2-1-1 編入学児童のプロフィール

第1表 編入学児童のプロフィール

児童名	S(男)	児童名	G(女)
編入学年	第3学年	編入学年	第6学年
編入年月日	1987年5月1日	編入年月日	1987年5月13日
在留国・市	フィリピン共和国・セブ市	在留国・市	中華人民共和国・上海市
在留期間	6年1ヶ月(2歳～8歳)	在留期間	13年(0歳から13歳)
教育機関	インターナショナルスクール	教育機関	現地小学校(1980年9月～1986年7月) 現地中学校(1986年9月～1987年4月)
使用言語	家庭—英語 学校—英語 地域—英語	使用言語	家庭—中国語 学校—中国語 地域—中国語
家族構成	父(日本人) 母(フィリピン人) 	家族構成	祖父(日本人) 祖母(日本人) 

本節では、1987年度の実践事例について、S君、Gさんを取り上げて紹介する。2人は、プロフィール（第1表）から分かるように「外国人児童」ではない。S君は、父親が日本人で日本語が話せるが、母親がフィリピン人で全く日本語が話せないという家庭に育ち、2歳から8歳までフィリピンに在留し、英語を使う生活をしてきた。Gさんは、中国からの引き揚げ者子女で、本人はもちろん両親も日本語が理解できなかった。本来、中学1年生の学齢であるが、日本語の学習と生活適応のため、学年を一つ下げて本校の第6学年に編入することになった。なお、S君は日本語の基礎を習得し、日本の学校生活に慣れるまでという条件付きで区域外就学を許可された。

2-1-2 専任教員による取り出し指導の方針

取り出し指導の方針であるが、A小学校では主として国語と社会科の全時数を専任教員（＝以下筆者）が指導することにしてきた。音楽、図画工作、家庭科、体育などの時間を除外した。これらは日本語の理解ができていなくとも、実技を伴う指導が多く、体感によって他の児童と一緒にでも支障なく活動できると考えたからである。

また、実験や観察など、実際に見たり操作したりして理解できる時間も、できるだけ在籍学級で指導するようにした。学級活動については、内容が理解できず話し合いに直接参加できないことが多いが、積極的に聞くという活動での参加はできる。学級での活動に参加するというそのことに意義を見出し、少しでも早く学級の一員としての自覚を持たせるように考えた。そして他の児童には、帰国児童・外国人児童の存在を一人の仲間として学級の中で早く認めてもらうためにも、在籍学級で過ごす時間が多くなるように配慮してきた。

2-1-3 「学校が怖い」というS君の指導について（編入学の日）

5月1日、S君の本校での学校生活1日目である。朝の会で学級（三年生）の児童に紹介したが、それから5分ほどして、周りの子ども達の歓声を自分への批判の声と勘違いして心細くなったのか泣き出し、教室の外で待っていた両親の下へ飛び出してしまった。筆者にわけを聞いてもらい落ち着いたが、こんなこともあり2・3校時は筆者のいる帰国子女教育室で過ごした。以下、そのときの筆者の指導記録の一部を紹介する⁽⁵⁾。

“Let's play baseball.”と誘いかけると、“I like baseball game.”と弾んだ声が返ってきた、そして目を輝かせながら身を乗り出してきたのである。私はこの子に今必要なのは「これだ!」と思い、しばらくはゲームに興じさせることにした。“Lan La La.”“Oh! Homerun.”など弾んだ声が出てきた。随分楽しそうであった。すっかり気分が落ち着いてきたようである。


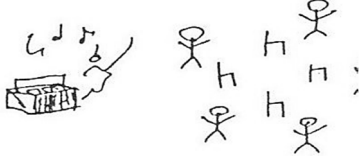
3校時は英語の本を読み聞かせた。いつも使い慣れている英語に触れて嬉しくなったのか、“I read, I read.”と、繰り返して言い、結局、私（専任教諭）が聞かせてもらうことになってしまった。給食の時間となり教室へ戻したが、担任に聞くと、焼きそばをおかわりするほどの食欲だったという。安心した。その日は、本来5校時までである日であったが管理職・担任と相談し、初日でもあるので過度な負担をかけないように配慮し、給食後は下校させることにした。日本（本校）での学校生活は、このようなことから始まった。 「授業記録 1/1989年」

以下、S君の転出（2ヶ月後に校区の学校へ編入学）までに行った指導の経過の概略を示すことにする（第2表）。表中のGさんは、前述の中国からの引き揚げ者子女で、T君は、日本語が不十分なアメリカからの帰国児童である。同じ日本語を学ぶという共通点のある仲間と一緒に、指導を受けることが励みになるのではないかと考え、学年の枠を越えて同じ時間に指導する時間を週3時間設定した。

第2表 指導の経過

「授業記録 2/1989年」

月日	指導内容	児童の様子	感想・所見
5 / 7 (木)	<ul style="list-style-type: none"> ・今日は～です。 一月日・曜日・天気一 ・昨日は～でした。 一月日・曜日・天気一 ・折り紙 紙の色の名前。 	赤, 青, 黄の色紙を使って船を折って見せてくれた。	<ul style="list-style-type: none"> ・英語で表現をしてから日本語で言い表すようにして理解しやすくした。英語の表現を待っていることが多い。 ・これはすぐ覚えた。 ・交通信号の色でもあるので意図的にこの色の紙を使わせた。
	体育で逆立ちするのをたいそう怖がっていた。		
5 / 8 (金)	社会科西宮巡りの日、乗り物酔いの心配をしていたがそれもなく結構楽しんでた。トイレ休憩の時、ポケットからいきなりお金を取り出し、自動販売機でコーラを購入したので驚く。これも習慣の違いである。説明し、勝手に購入してはいけないこと、飲んではいけないことを納得させたが、分からせるのに苦労した。		
5 / 9 (土)	<ul style="list-style-type: none"> ・英語と比べながら、僕は、N/Sです。これは何です。 これは机です。あれは何ですか。あれはテレビです。それは椅子ですか。いいえ、それは椅子ではありません。～を～して下さい。 		<ul style="list-style-type: none"> ・S君は教室に入った後、出入り口の戸を開けたままのことが多かったので「戸を開けて（開けて）下さい。」という依頼の仕方の学習をさせた。

<p>6/21 (日)</p>	<p>(日曜参観日)</p> <ul style="list-style-type: none"> ことば集め 動物 食物 <p>3人一緒</p> <p>・カルタ取り</p>	<p>しりとり遊びをしながら言葉集めをした。「ん」のつく言葉を出したら「負けだよ」と言っても、「そんなの、おかしい、言葉は言葉だ。」と言い、目に涙を浮かべながら、自分は負けていないことを主張してきた。</p> <p>(集めた言葉の数)</p> <p>動物の名前…12個 食物の名…21個</p> <p>一番多く集めた。</p> <p>最後までやり通したことで、多くの言葉集めができたことを褒め、さらに3人の中で一番多く言葉集めができたことを知らせるや、びっくりするほどの大声で「やったー、やったー」と叫び、両手を上へ上げ、「I'm a champion.」を連発し、笑いを誘っていた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 勝負がねらいではなく、できるだけ多くの言葉を出させたかったので、主張を認め、「ん」のついた言葉でもその前の文字を頭に記して、言葉探しを続けさせた。 (ex. き^ん) 一度出てきた言葉と重ならないように、という条件に沿って一生懸命に学習を進めていた。 感受性の強い児童であることがよくわかる。非常に明るく、楽しい児童である。 T君やGさんが一番になったら、今度はその手を取り「champion.」「champion.」とレフリー役を上手にまた面白く演じる。 この性格が皆に愛されるのに一役かっているのだなとつくづく思う。
<p>6/25 (木)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 1年生用国語教科書「大きななな」の読み フィリピンの遊びの紹介 Sack race Trip to Jerusalem 	<p>会話文が好きで、できるだけ登場してくる人物を使い分けて読む工夫をしていた。</p> <p>黒板に絵を描いて一生懸命遊び方を説明してくれた。</p> <p>Sack race</p>  <p>Trip to Jerusalem</p> 	<ul style="list-style-type: none"> 独特のアクセントを付けて読むので、思わず吹き出しそうになることがある。 男の子、女の子の声をうまく使い分けて読むのに感心する。 取り出し指導の学級で本児とのお別れ会を計画、そのときにするゲームはS君の1番好きなゲームをすることになった、S君の家に教えてもらったゲームだそうだ。 言葉の指導のまとめに位置づけてS君にゲームの仕方について説明させた。
<p>6/30 (火)</p>	<ul style="list-style-type: none"> お別れ会 はじめのことば (Gさん) カルタ取り 野球ゲーム うた S君のことば (T君) 	<p>いつになく憂鬱そうな表情で帰国子女教育室へ来る。元気がない。そして、誰とも顔を合わそうともしない。</p> <p>カルタ取りが始まっていつもの元気さはない。見るとT君もGさんもそうだ。</p> <p>大好きなはずの野球ゲームをしていても無言である。</p> <p>うたが始まると、もうみんなボロボロと涙を流してばかり。</p>	<ul style="list-style-type: none"> S君にとって今日が本校での最後の授業日である。

(出典：『今求められる帰国子女・外国人子女教育』、近代文芸社、1996年、筆者作成)

2-1-4 Gさん、中学生だけど小学校へ編入学

次にGさんの取り出し指導について述べる。Gさんは、13年間中国で暮らし、日本語を全く話すこともできないし、読んだり書いたりして理解することもできなかった。自分の名前すら日本語での表現が難しかったので、まずはひらがなの指導から始めることにした。

1学期の指導を振り返って、筆者は以下のように記録している。

とにかくまじめによく努力した。ひらがなの練習は、絵と対比しながらさせてきた。家庭学習として課題も多く与えたが、きっちりやり遂げてきた。2週間も経つ頃には、すっかりひらがなをマスターしてしまった。その後に練習したカタカナや漢字についてもまた然りである。

「よく努力するね」と励ますと、「私、通訳になりたい、もっと努力する。」と、話してくれた。はっきり目的意識をもち、学習に取り組んでいる。そして、話はしっかりメモを取りながら聞く。その学習に対する姿勢が適応を早くしたように思う。漢字の練習では、中国で使われている漢字と共通のものもあり、ある事柄を説明するとき、どうしても意味が通じにくいときなど、漢字で明記することで理解を助けたことも多い。それでも『通じていないな』と思われるときは、日中辞典による会話や英会話を通して指導を行った。 「指導記録3/1989年」

2-1-5 明らかになったこと

このような手探りの指導を通して、明らかになったことは次のような点である。

- ① 英語圏の国に在留していたか、漢字を使う国に在留していたかで理解に違いがある。
- ② Gさんのように一つの言語（中国語）をしっかりと身に付けていると、日本語の理解は早いようである。母語の読み書きが不十分な状態であると、日本語の理解にも時間がかかる。
- ③ 日本の言葉を初歩から習得させていくには、その児童の生活や言語的背景、これからの日本語使用の必要性に合わせて、緻密な学習プログラムを組まなければならない。
- ④ 日本語を身に付けさせるために一つのプログラムを組んでみても、9歳の児童に指導するのと13歳の児童に指導するのでは、習熟度に大きな差が出てくる。
- ⑤ 専任教員と在籍学級の担任との連携の方法を具体化すると共に、職員全体で育てる視点での指導計画作成についての取り組みが必要である。
- ⑥ 日本語指導の教材を収集・整備し、児童一人一人に対応した教材を作成するなど指導方法の改善を図ることが次年度への課題として残された。

2-2 姉妹校からの編入児童の学級指導（1989年度）

2-2-1 Bさんのプロフィール

第3表 Bさんのプロフィール

児童名	B(女)	編入学年	第2学年
編入年月日	1989年9月1日	出身国・市	アメリカ合衆国・ワシントン州プルマン市
生育期間	8年10ヶ月(0歳~8歳)	教育機関	現地小学校(フランクリン小学校)
使用言語	英語	家族構成	父、母、姉、本人

Bさんの両親は、中学校・高等学校で英語を教える英語指導教員(ALT)として来日した。Bさんが通学していたフランクリン小学校とA小学校とは、1987年度から姉妹校として交流をしており、これまでもビデオや図工作品、クリスマスカード、年賀状、写真などを互いにやりとりしていたが、

当該校の児童がしかも1年間も滞在するのは初めてのことであった。

子ども同士のコミュニケーションを多く取らせて欲しいという保護者の願いで、取り出し指導は1日1時間とし、学校生活の大部分を2年生の学級で過ごすように計画した。取り出し指導では、これまでの研究成果を生かしつつ、遊びやゲームを通して日本語を発する場面をできるだけ多く設定し、無理なく会話力がつくように配慮した。

学校生活の主な場面における、他の子ども達との関わりについて、担任の記録から拾って紹介する。

① 担任に決まって

アメリカ人の編入は初めてで、しかも英語しか話せないと聞き驚いた。担任が英語を理解できないし、ましてや話すこともできないのにクラスに受け入れて、クラスの子も達とうまくやっていたのだろうかと不安でいっぱいであった。こんなことなら、英語を学習しておくのだったと後悔した。でもアメリカから来たBさんは、言葉、習慣、学校生活などほとんどのことが違う環境に置かれ、不安でいっぱいには違いない。Bさんが明るく楽しく学校に来られるよう、全力を尽くそうと思った。

② 始業式の日



写真1 始業式の日
のBさん

学校長より全校児童に、姉妹校フランクリン小学校から来たことや「Bさんとなかよくしましょう。」という話があった。学校長の横に立ったBさんは、恥ずかしいのと緊張との両方で、小さい声で自分の名前を言った。学校へ来る途中、何度も日本語で「どうぞよろしくお願ひします。」と練習したそうだが、本番では言えなかった(写真1)。

その後教室に入り、クラスの子も達に紹介した。普段の始業式の日であれば、子ども達もは久しぶりに出会った喜びを話すが、この日は驚いてそして興味深そうに眺めていた。青い目とブロンドの髪の毛、そして色が白いので人形のように感じたそうだ。

③ 給食

初めての給食の日、Bさんが上手に箸を使って食べているのを見て、クラスの子も達は「アメリカでも箸を使うんだよ。」「いや、スプーンとフォークだ。」「Bさんは上手だからアメリカでもずっと箸で食べている。」と、いろいろいっていた。Bさんに聞くと、Bさんの家族は日本へ行くことが決まった日から、夕食に箸を使って食事をしてきたということだった。フランクリン小学校では、家からランチを持って来てもよいし、1ドルまでならランチを買って食べることができる。それにお菓子を持ってきてもいいと聞いた子ども達もは、うらやましそうな声を上げていた。

④ 体育会



写真2 リズムにのり演技するBさん
(左端)

入場行進、全校ラジオ体操、全校ダンス、学年演技などの集団行動の全てが初めての経験らしく、体育会前の練習時はよく「たいへんつかれる。」と言っていた。

Bさんのことが、全校の子も達を通じて保護者の方へよく伝わっているようで、地域の方々にも快く受け入れられているようだ。クラス対抗リレーで、バトンを受け取り走り出すと、「Bさん、がんばって。」と保護者席から応援の声も飛び交った(写真2)。

⑤ 遠足

秋の遠足は、神戸の須磨離宮公園へ電車で行った。途中の駅から同じように遠足に行く子ども達に乗ってきて、車内は超満員だった。Bさんを見て、口々に「外人や」「見て、見て」と指さす子ども達に、グローバルな視野で違いを認め、共に生きる態度や能力を育てる国際理解教育を進めていくことの大切さを痛切に感じた。

フランクリン小学校の遠足は、保護者も一緒に行くとのこと、母親は教師と子どもだけで行くこの遠足に喜んでた。

⑥ 清掃と係活動

フランクリン小学校では清掃は業者が来てするとのこと。Bさんは、クラスのどの子よりも熱心にも上手に清掃をする。1年生の時から掃除をしてきているクラスの子も達は、Bさんの態度を見て反省していた。係活動は、黒板係をしている。背が高いので、黒板の上の方は全部Bさんが消している。

⑦ 持ち物

日本の学校のほとんどがそうであるように、A小学校でも学習に必要な物を持ってこないというきまりがある。Bさんの持ってくる物の中に、学習に必要な物があった。カメラがその一つである。クラスの子も達には、「アメリカの学校と日本の学校とでは、いろいろ違うので、写真に撮ってアメリカの友だちに見せてあげるのよ。」と言ってきた。

もう一つは時計である。「通学でバスと電車に乗るから乗り遅れないように時計をしているのよ。」と説明していたら、社会見学でバスに乗るとき、2人の子どもが時計をしてきたのには驚かされた。



写真3 Bさん（前列左から二人目）のお別れ会に保護者も参加

滞在期間が1年間で、再びアメリカに帰るといふことで、日本語の習得よりも、学級の子も達と共に生活するなかで、お互いの文化などの違いを知り、尊重し合うことの大切さを学んで欲しいと思い、日々の指導を続けてきた。Bさんは約11ヶ月の滞在を終え、アメリカに帰っていった。関西弁の日本語と、たくさんの楽しい思い出を持って（写真3）。

2-3 日本で働くために来日した保護者をもつ外国人児童の教育（1990年度）

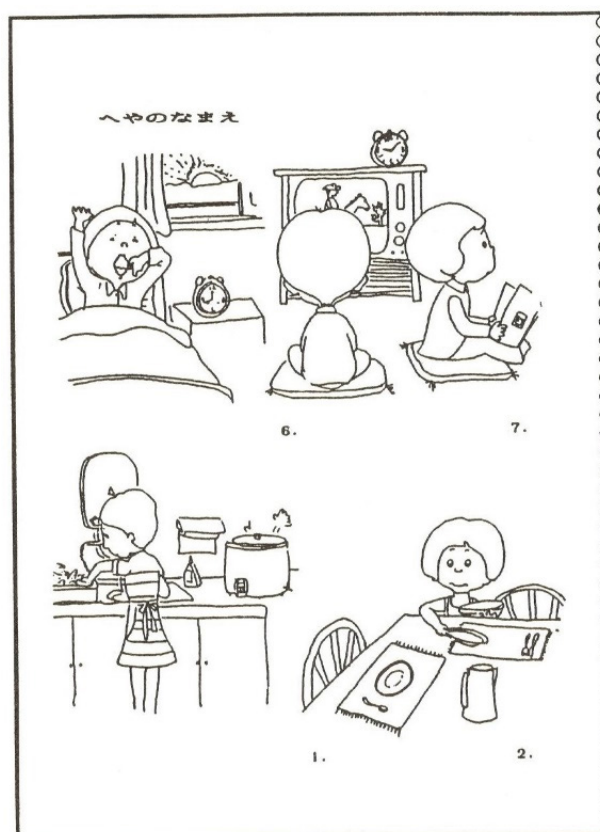
世界の情勢が激変し、国際化が進展し、日本は『バブル経済』の真っ只中の年で、本校へ編入学した外国人子女も一挙に7名に増加した。国籍はブラジルと中華人民共和国で、それぞれ6名、1名である。

本校が、帰国子女教育そして国際理解教育に取り組んで7年目。研究を始めた当初は、全くの手探りだったが、年を経るとともに実践を積み定着した指導の内容・方法もいくつかある。ここでは日本語指導についてその一端を述べる。

3. 日本語指導

3-1 日本語のテキスト

帰国児童，外国人児童のスムーズな受け入れを行うためには，小学生のレベルに合った日本語の教材が準備されなければならない。いつ，どの学年・学級に日本語の指導の必要な児童が編入してきても，誰もが気を張らずに指導できるように，筆者が中心になって日本語学習教材の作成を行った。日本語テキストは種類も増え市販もされている。しかし大人を対象とした内容のものが多く，社会生活を舞台にしているものが少なくない。生活経験の少ない小学生にはやや難解なものとなっている。日本語の理解が十分でない帰国児童・外国人児童には，家庭や学校での生活がその内容となっているものが指導してきた経験上望ましいように思う。



第1図 編集した「日本語テキスト」の例（筆者作成）

たとえば，（1）自分自身のことがわかる内容であること，（2）自分自身や自分の家族のことをもとにして考えることができるもの，（3）衣・食・住など児童の生活に密着した内容であること，（4）学級生活をもとにして考えることができる内容であること，（5）滞在していた国や地域・町での経験や体験を引き出し生かせる内容であること，などである。生活から離れて頭だけで考える日本語の学習では効果が上がりにくい。児童の生活実態を基盤にして内容を工夫することが大切である。次に示すのは，その趣旨に沿って編集した日本語教材の一例である（第1図）。

第4表 「あたらしい たんご」の頁

あたらしい たんご

にほんご	ポルトガルご	中国語	英語	スペインご
だいどころ	cozinha	厨房 chúfāng	kitchen	cocina
しょくどう	sala de jantar	食堂 shítāng	dining room	comedor
おうせつま	sala de visitas	客厅 kètīng 会客室	drawing room	sala de visita
げんかん	entrada	门口 ménkǒu	entrance	entrada
ガレージ	garagem	车库 chēkù	garage	garaje
しんしつ	quarto de dormir	卧室 wòshì	bedroom	recamara
いま	sala de estar	起居室 qǐjūshì	living room	sala
ふろば	banheiro	浴室 yùshì	bathroom	baño
つくります	fazer	作 zuò	make	haeer
みます	ver	看 kàn	watch	ver
あそびます	brincar	玩 wán 游戏 yóuxì	play	jugar
べんきょう	estudar	学习 xuexí	study	estudiar
たべます	comer	吃 chī	eat	comer
ねます	deitarse dormir	睡 shuì 就寝 jiùqǐn	go to bed	dormir
へや	quarto	房間 fángjiān 屋子 wūzi	room	cuarto
ごはん	arroz cozido	米饭 mífān	cooked rice	arroz

(出典：『今求められる帰国子女・外国人子女教育』，近代文芸社，1996年，筆者作成)

3-2 『日本語テキスト』編集に当たって留意したこと

『日本語テキスト』編集に当たって留意したことは、次の3点である。

① 4カ国語の言語に対応できること

ポルトガル語、中国語、英語、スペイン語圏からの編入学児童に対処できるよう、「あたらしい たんご」の欄に、日本語と対応させて4カ国語を掲載した（第4表）。

② 着色しながら楽しく学習できること

児童は塗り絵が好きである。挿絵にきれいに色を塗り、色の名前を覚えさせ、テキストの完成を図りながら、楽しく積極的に学習できるようにした。

③ 児童の名前をテキストに盛り込むようにすること

会話練習の中に登場してくる人物には、学習者の名前を採用し、テキストに親しみをもって学習を進めることができるようにした。

④ テキストの作成には、現地での生活経験があり正しい言語が使用できる保護者や専門家が加わること。市教育委員会の協力を得て作成した。

3-3 日本語指導実践例

以下、このような趣旨で編集した『日本語テキスト』の日本語指導カリキュラムを示す(表6)。その後、カリキュラム No10 の実践例を載せているが、文中の対象児童 No3~No7 は、取り出し指導対象児童のプロフィール(第5表)を参考にして欲しい。

3-3-1 日本語学習指導

日本語学習指導略案	
1 対象	No.3~No.7 の児童 (第5表)
2 実施年月	1990年11月
3 単元名	「ぼくのへや わたしのへや」(カリキュラム No.10)
4 趣 旨	<ul style="list-style-type: none"> ・この教材は家庭での生活の場面を振り返らせながら、部屋の名前や用途に応じた使い方についての語彙を増やし、それらのことばを使って会話をしたり簡単な文章を作ったりすることができるようにすることがねらいである。 ・子ども達は、滞在国や今住んでいる家いくつかの部屋があり、それらが用途に応じて使われていることは経験的によく知っている。しかし、日本語で部屋の名前を言い表すことについてはまだ慣れていない。部屋の使い方と関係の深い動作を表す言葉となると考えの及ばないところである。 ・そこで、まず部屋の名前を表す言葉から学習を始めたが、着色作業をさせたり絵を見てどこで何をしているところか滞在国の言葉で言ったり書いたりさせるなど、滞在国との比較において家庭での生活を捉えさせたい。
5 単元目標	部屋の使い方とつながりのある動作を表す言葉を知る。
6 指導計画 (全5時間)	部屋の名前は? 1時間(本時) 部屋の使い方を表すことば 1時間 会話をしよう 1時間 文字で表現しよう 1時間 自分の家を書こう 1時間

(出典:『今求められる帰国子女教育・外国人子女教育』, 近代文芸社, 1996年, 筆者作成)

第5表 取り出し指導対象外国人児童のプロフィール(編入学順)

No.	名前	性	学年	歳	出身国・市	言語	編入年月
1	H	男	6	13	ブラジル・ロンドリーナ	ポルトガル語	1990・4
2	R	男	5	11	ブラジル・ロンドリーナ	ポルトガル語	1990・4
3	E	女	2	7	ブラジル・サンパウロ	ポルトガル語	1990・9
4	I	女	5	11	ブラジル・サンパウロ	ポルトガル語	1990・9
5	A	女	4	10	ブラジル・サンパウロ	ポルトガル語	1990・10
6	K	男	5	13	ブラジル・サンパウロ	ポルトガル語	1990・10
7	H	女	6	12	中国・ハルビン	中国語	1990・10

(出典:『今求められる帰国子女・外国人子女教育』, 近代文芸社, 1996年, 筆者作成)

第6表 日本語指導カリキュラム（例）

No.	学習単元名	学 習 内 容	ね ら い	留 意 点
8	まる 三かく 四かく	・図形の用語を読み書きする。	図形を使って作図できる。	指示した図形を使って作図させ、着色させる。
9	たのしい あそび	・じゃんけん遊びをする。 ・絵を見て何をして遊んでいるところかを言う。	「…をして遊びます」 「…で遊びます」 「…をします」という言い方に慣れる。	「～する」「～をして遊ぶ」という言い方を基礎として、遊びに関する語彙を増やす。在留国での遊びについて、日本語で話させる。
10	ぼくのへや わたしのへや	・絵を見てどこで何をしているところか言ったり書いたりする。 ・家の部屋について教師と話し合う。	部屋の使い方とつながりのある動作の名前を知る。	家庭での部屋の名前や使い方についての語彙を増やす。 在留国での使い方などと比べさせる。
11	カレンダー	・カレンダーを見て、日にちや曜日を読む。 ・自分の誕生日に欲しいものを考える。 ・他人の誕生日を聞く。	月日を日本語で正しく言える。 曜日を日本語で正しく言える。	誕生日を教えてもらうことで、会話のしかたに慣れさせる。 在留国の祝日について話させる。
12	…してもいい ですか	・許可を求める言い方を知る。	「～してもいいですか」という言い方に慣れる。	相手に許可を求める言い方に慣れさせる。
13	ひがしくんのかぞく	・家族の詳しい紹介をする。	家の人の仕事や役割がわかる。 通勤や通学では何を利用しているかわかる。	家族の紹介文を書かせ、他の人に知らせることができるようにする。
14	どちらが大きい？ 小さい？	・大きい、小さい、長い、短い、太い、細いの使い方を覚える。	「～は～より長い」という言い方で正しい文を作ることができる。	大きさを比べる時の言葉の使い方を習熟させる。
15	ぼく みんな すき	・絵を見て何に使う道具かを言う。 ・食事について教師と話し合う。	食べることにつながりのある動作や簡単な食べ物、食器の名前を覚える。 聞いたり教えてもらったことをもとに、自分の食生活について振り返る。	絵本などを参考に、食べ物に関する語彙を増やす。 在留国と日本との食事のしかたやマナーの違いに気づかせる。

（出典：『今求められる帰国子女・外国人子女教育』、近代文芸社、1996年、筆者作成）

⑧ 本時の目標

台所、食堂、風呂場の部屋の名前を知り、それらを使った簡単な文を作ることができる。

⑨ 本時の展開

第7表 学習指導略案（ぼくのへや わたしのへや）

教師の意図	児童の問題意識	準備物	指導上の留意点
1 自分の家の部屋の様子を想起し、それぞれの部屋の使い方を発表させる。	・家にはいろんな部屋があるな。	日本語教材 プリント プリント	・自分の生活の中心である家に目を向けさせ、部屋の名前と用途について発表させる。 ・母語でも可とする。
2 指示した教材の絵が何の部屋か調べさせ、部屋に合った色に着色させる。 ・台所 ・食堂 ・風呂場	・どんな使い方をしているかな。 ・台所はどれかな。		・台所、食堂、風呂場を着色するよう指示。
3 「～が～で～をしています。」の言い方を身に付けさせる。	・風呂場は何色にするかな。 ・使い方がわかったよ。		・着色する場所によりことばと部屋が結びついているかチェックする。
4 例文づくりをさせる。	・いろんな文を作ってみよう。		・主語を入れ替えればいくつもの文ができることを指示する。助詞の使い方に留意。

（出典：『今求められる帰国子女・外国人子女教育』、近代文芸社、1996年、筆者作成）

3-3-2 家族のみんなの台所

『ぼくのへや わたしのへや』の学習をした（第7表）。台所が話題になったときI（No.4）さんは「私の家ではお母さんはあまりごはんを作らないです。」と言った。そのわけを尋ねると、日本の家庭内での家族の役割分担の仕方と違っていた。

Iさんの話を詳しく聞いてみた。すると意外なことが分かる。家族一人一人にそれぞれ得意なメニューがあるので、交代交代で料理をする。材料とかの準備は母親がすべて面倒を見るが、5人で分担するから必ずしも母親が台所で食事を作るのではないのである。これはおもしろい、と思う。「お母さんは台所でハンバーグをつくります。」「わたしは台所でスパゲッティをつくります。」「お父さんは...、妹のE（No.3）は...。」と続々文章が口から出てくる。家庭の生活をそのまま学習内容に活かし、学習を楽しんでいる。

K君（No.6）とR君（No.2）は体が人一倍大きい。「日本のふる場はせまい。ブラジルでは足がのびせる。」と両国の生活実態の違いについて強調し、課題意識をもって話しかけてくる。ほんのちょっとしたきっかけから、思いもしない素材が子どもの学習意欲を高め、体験や経験を引き出し、また活かしながら子どもの学習活動を豊にすることができた。今後も生活実態に応じた素材を準備し、十分に現地での生活経験を引き出す工夫をしていきたい。

3-3-3 指導上特に配慮したこと

Hさん（No.1）とK君は学齢では中学1年生である。日本語の力や、滞在予定年数、教育形態の相違、保護者や本人の希望など諸般の事情を考慮し、小学校での就学を決めた。学年が違うのは編入時期の違いによるもので、卒業までの残日数を考慮し6年生と5年生への編入に決めた。

Aさん（No.5）は学年では5年生である。K君との兄妹関係を考慮し、表の通りに別の学年に編入学させた⁽⁶⁾。

4. 外国人子女教育に取り組んで

4-1 外国人子女教育を支えてきたもの

A 小学校が外国人子女教育に取り組んで 7 年（1987～1994 年）が経った。遅々とした歩みであったが、年々着実に成果を上げていった。外国人児童の受け入れを始め、適応指導、日本語指導などが上手く機能してきたのには大きく 4 つの理由がある。

1 つは、A 小学校職員の個々の児童に応じた細やかな指導である。10 年にわたり帰国児童を受け入れてきた豊かな経験が、全職員の中にしっかり受け継がれていたように思う。笑顔で迎え、これまでの生活を聞き取る。「したことがないことは、できなくてあたりまえ」と、焦らず見守る。そして帰国児童の個性・特性を色々な場面で活かす。このようなことを、どの職員も当然のこととして日常的にやってきた。

2 つ目は、A 小学校には帰国子女教育専任(文部省加配)の教員がいたことである。日本語を教えるのによい教材を開発したいと思っても、学級担任の力だけでは難しい。専任教諭が日々の取り出し指導を通して、工夫して作成したテキストや教材は、市販のそれと違い子ども達にぴったり合っている。また教育相談や保護者会、臨地学習や国際理解教育の推進と、理論と実践の両面をリードしている。

3 つめは、家庭・地域の力である。毎年の「コマツ国際フェア」の行事は創意ある教育活動として、コマツの地域の人々と一体となって行っており、地域の人々の深い理解と多大なる協力を得ている。地域の人々の本校への期待は大きく熱い。日本語が理解できない親に、学級を離れて近所や地域の人々が関わってくれる。休日には車であちらこちら連れて行ってくれたり小さなパーティを計画してくれたり、生活の細々としたことにも尽力を惜しまない。

そして、最後は、この地域で育ってきた子ども達である。本校では「帰国児童の受入に際しても、国際的視野（理解・感覚）のある学級の方がスムーズな受入がなされると思われる。」という仮説の上に国際理解教育を推進してきた。教科指導の中で、委員会活動・クラブ活動など相違を活かして、また学校行事を工夫して、国際交流の体験を通して…といったように全教育活動で取り組み、「広い視野で考え、行動できる子」の育成を図ってきた。学校生活で、外国人児童とオープンで触れあうのは学級の子どもである。彼らの力なしでは適応も日本語獲得も考えられない。

外国人児童を担当した教師は、そのような感想を話してくれた。「何といても L 君が明るく安定した気持ちで 1 日の欠席もなく通学できたのは、支える仲間がいたためだと思う。自然体で L 君を受け入れた子ども達に、国際理解教育の積み重ねの成果を見たように思う。」と。

4-2 外国人子女教育から学んだこと

私たちは、外国人子女教育を通して多くのことを学んだ。それらを一言で言うと、『違っていることを認めること』と『ともに生き、ともに伸びる』といえるだろう。

私たち日本人は、自分たちと異なった価値観をもつものを排除しようとする閉鎖性があるとよく指摘される。「排他性」や「閉鎖性」をふだん意識することなくこれまで過ごしてきたが、帰国児童や外国人児童が入ってくることで、表面化し意識化する。それぐらい違いが強烈なのである。

「違いを認める」といってもそんなに簡単なことではない。違いは分かるが、「認める」には相当なエネルギーが必要である。A 小学校では体験を通して心情面から問いかける方法や、討論として知的に理解する方法など工夫して取り組んできた。「グローバルな視野」で、違いを認め、体験した文化を尊重し合って、ともに生きる態度や能力を身に付けることにこれからも努力していきたい。

「帰国子女教育」「外国人子女教育」「国際理解教育」と名称は変わるが、A 小学校ではすべての教

育の根本理念は『人間尊重』にとらえ、10年間、地道に取り組んできた。教師が一人一人の違いを見つめ、認める人間尊重の心を基盤に学級経営を展開すれば、違いを認め合う芽が子ども達一人一人に育まれる。「教師が変われば子どもが変わる」といわれるよう、私たちは常に自分自身に厳しく問いかけながら、芽をさらに育み、大きく育てる実践を積んでいくことが大切であろう。

注・引用文献

- (1) 古岡俊之「5. 外国人子女教育 学級指導事例（姉妹校フランクリン小学校からの編入学児童の事例）」『平成元年度 帰国子女教育研究紀要』、西宮市立小松小学校（文部省帰国子女教育受入推進地域センター校）、1990年、pp.46-53
- (2) 岡野君代監修 古岡俊之著「今求められる帰国子女・外国人子女教育の主要課題」『今求められる帰国子女・外国人子女教育』、近代文芸社、1996年、pp.13-18.
- (3) 文部科学省「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受け入れ状況等に関する調査(平成28年度)」(2017. 3)の結果によると、「日本語指導が必要な外国人児童生徒」の総数は、34,335人となっている。
- (4) 文部科学省『外国人児童生徒受入の手引き（改訂版）』、明石書店、2019年、総頁数68p.
- (5) 西宮市立小松小学校（文部省帰国子女教育受入推進地域センター校）「3. 適応指導(3) 取り出し指導の事例」『昭和62年度 帰国子女教育研究紀要 第4集』、pp.13-29.
- (6) 前掲(2) 「(3) 言語の力をつける基本理念」 pp.65-71.